

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 1

## 認知言語学から見た英語の構造： 前置詞・不変化詞を中心に

東京外国語大学大学院 総合国際学研究院  
大谷直輝 (otani@tufs.ac.jp)

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 4

## 自己紹介

- ・名前: 大谷直輝
- ・専門: 英語学(認知言語学、コーパス言語学、談話機能文法、構文文法)
- ・学位: 博士(人間・環境学)(平成24年9月)
- ・主な経歴
  - ・(平成)16年3月 東京外国語大学外国語学部欧米第一課程卒業
  - ・(平成)21年3月 京都大学大学院人間・環境学研究科 博士(後期)課程修了
  - ・(平成)21年4月 埼玉大学英語教育開発センター 助教(～平成25年3月)
  - ・(平成)25年4月 京都府立大学文学部 講師(～平成27年3月)
- ・関心がある事象
  - ・人間の認識の仕方がどのようにことばの構造に反映されるか。
  - ・ことば一般を分析するための実証的(科学的)な方法論。
- ・キーワード:
  - ・前置詞、句動詞、語彙関係(多義語・類義語・反義語)、身体性、用法基盤モデル、文法化、カテゴリー化

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 2

## 本発表の構成

- ・I部
  - ・自己紹介
  - ・研究の3つの柱: 認知言語学、談話・機能言語学、コーパス言語学
  - ・研究対象の紹介: 英語の前置詞・不変化詞
- ・II部
  - ・事例研究1: *over*と*under*の支配的意味と文法機能
    - ・ He has a strange power *over* me.
    - ・ She is *under* my control.
    - ・身体的な経験が言語の意味的・文法的な特徴を動機づける。
  - ・事例研究2: 二種類の*aside*構文の談話機能
    - ・ *Leaving* justice *aside*, however, there are good pragmatic reasons for concern.,
    - ・ The wind *aside*, the major hazard may be the distracting landscape.
    - ・意味は類似していても談話機能はまったく異なる構文を分析する。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 5

## 研究の3つの柱

- ・認知・機能言語学の理論と方法論
  1. 認知言語学(ことばと認知的基盤)
    - ・ 認知文法論: Langacker 1987, 1991, 2008, Taylor 2002
    - ・ 認知意味論: Lakoff and Johnson 1980, 1999; Lakoff 1987; Evans and Green 2006; Talmy 2000a, 2000b
    - ・ 構文文法: Fillmore, Kay & O'Connor 1988; Goldberg 1995, 2006
  2. 談話・機能言語学(文法の談話的な基盤)
    - ・ 文法の談話的基盤: Hopper and Thompson 1980, 1984; Du Bois 1985, 2003; Givón 1984, 1990; Hopper 1998
    - ・ 用法基盤モデル: Bybee 1985; Langacker 1988
    - ・ 文法化と語彙化: Hopper and Traugott 1993; Brinton and Traugott 2005
  3. コーパス言語学(実証的な言語研究の方法論)
    - ・ Collostructional analysis: Gries and Stefanowitsch 2003, 2004
    - ・ Behavioral Profiles: Gries and Divjak 2009; Gries and Otani 2010

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 3

## 第I部

- ・自己紹介
- ・研究の3つの柱: 認知言語学、談話・機能言語学、コーパス言語学
- ・研究テーマの紹介: 英語の前置詞・不変化詞

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 6

## 研究対象の紹介

1. 英語の前置詞・不変化詞・句動詞
  - ・前置詞が表す意味:
    - ・ *arrive* {*at, in, on*} the airport / *walk* {*across/through*} the grass
  - ・句動詞の目的語:
    - ・ He wiped off the table. / He wiped off the dirt.
  - ・不変化詞の完了用法:
    - ・ wear out, fill out, narrow down, start off/up
2. 基本的な語彙関係(類義性、反義性、多義性)
  - ・多義的な意味の相互関係: *up, out, come up, pick up*
  - ・言葉の非対称性:
    - ・非対称的な分布: *eat* {*up* / \**down*}, *use* {*up* / \**down*},
    - ・非対称的な意味拡張: *come* {*up/down* to me}
  - ・類義的な動詞不変化詞構文: *burn* {*up/down*}, *shoot* {*up/down*}

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 7

## 補足: 最近特に興味を持っていること

- 前置詞の(文法的な)機能
  - 前置詞の文法的な機能がどのように中心的・空間の意味から生じるか?

- 前置詞句の名詞句的用法(特に、前置詞の補語句となる前置詞句)
  - We must choose a member from *within* the group. [強調型]
  - He picked up the gun from *under* the table. [特定型]
  - We must choose a member from *outside* the group. [付与型]
- 前置詞の直示的用法
  - (2a) The sun's gone down, and the stars are out now.
  - (2b) Is Derek about? There's a phone call for him.
  - (2c) My vacation is just several days off/away.
- 不変化詞が表す完了用法の分類
  - (3a) He burned up his house. / He burned down his house. [指向性]
  - (3b) The species died out. / The fire died down. [完了の種類]

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 10

## 研究の要約

- 考察対象: *over*と*under*の支配的意味
  - (1) He has a great *power over* me.
  - (2) She is *under* my control.

- 「支配者」が「被支配者」に「力」を行使するので、「支配的意味」に分類される。
- over*と*under*が示す支配的意味は文法的にも意味的にも異なる振舞いを示す。
  - over*: 意志を持つ支配者による能動的で直接的な支配
  - under*: 被支配者が一定の状況下におかれる支配
- over*と*under*の支配的意味の違いは空間的な意味(上下関係)によって動機づけられる。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 8

## 第II部

- 事例研究1: *over*と*under*の支配的意味と文法機能
  - He has a strange *power over* me.
  - He is *under* my control.

- over*と*under*の支配的意味は、意味的・文法的特性が異なる。
  - 各支配的意味は人間による上下に関する身体的な経験に動機づけられる。
- 事例研究2: *aside*構文の談話機能
  - However, *leaving aside* the intolerable heat, there was no doubt that New York was a really amazing place.
  - These grumbles *aside*, the Clio is an easily driven, user-friendly car.

- 二種類の*aside*構文は意味は類似するが談話レベルでの機能が異なる。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 11

## 目次

- はじめに
- 本研究の立場(先行研究とその批判的な検討)
- over*と*under*の支配的意味
- 空間的意味から支配的意味への拡張
- 支配的意味から文法機能へ
- まとめ

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 9

## 事例研究1: *over*と*under*の 支配的意味と文法機能

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 12

## 1. はじめに

- 本発表の目的:
  - 英語の前置詞*over*と*under*の「支配的意味」は文法的・意味的に異なる特徴を持つ点を明らかにする。
  - 英語の前置詞*over*と*under*の「支配的意味」の振舞いの違いは、ヒトの上下に関する身体的な経験に動機づけられている点を、おもに認言語学の観点から論じる。
- 本発表の分析対象(*over*と*under*を含む支配的意味)
  - (a) He has a strange *power over* his brother.
  - (b) He has fallen *under* her influence.

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 13

## 1. はじめに

- 支配的意味
  - 支配者が被支配者に対して、力を行使する。
  - 支配の意味における3つの参与者(支配者、被支配者、支配力)

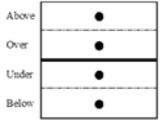
[例] He has a strange power over his brother.  
 支配者 支配力 被支配者  
 We are under his control.  
 被支配者 支配者 支配力

- 支配的意味と空間的意味
  - (1) He has a strange power over his brother. [支配的意味]
  - (2) He has fallen under her influence. [支配的意味]
  - (3) He put his hand over my shoulder. [空間的意味]
  - (4) His wallet fell under his bed. [空間的意味]
  - 支配的意味は空間的意味から派生する。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 16

## 2. 本研究の立場

- 右の図は四つの前置詞が表す位置関係を対称的にとらえている。
- 右の図は現実の世界における垂直軸を表しているわけではなく、多くの要素が捨象されている。
- すなわち、人間が実際に認識する世界の垂直軸は非対称的にてきており、世界を非対称的に認識する。
  - “an up-down or top-bottom asymmetry” of our body
  - “given that humans walk upright, and because we have a head at the top of our bodies and feet at the bottom, and given the presence of gravity which attracts unsupported objects, the vertical axis of the human body is functionally asymmetrical.” (Tyler and Evans 2003)



2015/5/20 語学研究所 定例研究会 14

## 1. はじめに

- 先行研究 (Lakoff and Johnson 1980)
  - overとunderの支配的意味は空間的意味から生じる
  - I have control over her. / His power rose. / He fell from a power.
    - HAVING CONTROL IS UP; BEING SUBJECT TO CONTROL IS DOWN
  - 支配・被支配の関係が空間的な上下の関係に見立てられる
- 先行研究の問題点
  - overとunderの支配的意味が空間的意味から生じると指摘しているが、overとunderの支配的意味に見られる文法的・意味的な違いについては触れられていない。
- 本研究の主張
  - overとunderの支配的意味は上下に関わる異なる認知的な基盤に動機づけられているため特性が異なる。そのため、支配的意味の違いを論じるには、垂直軸における非対称性に注目する必要がある。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 17

## 2. 本研究の立場

- ヒトが認識する世界における垂直軸



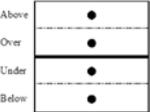
1. 何かの上に居ることと何かの下に居ることは異なる種類の経験である。
2. 何かの上に居る場合、下のものと接触しており、重力によって、下のものに圧力がかかる。
3. 何かの下に居る場合、上のものとは接触せず、上のものから圧力もかからない。

上下に関して非対称的な経験が、  
様々な言語現象を動機付ける基盤となる。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 15

## 2. 本研究の立場

- Tyler and Evans (2001,2003)
  - overとunderの支配的意味の分析
    - overとunderには支配的意味がある。
    - 「支配」の概念に関連する二つの要素: 「上」と「近接」
      - “the first is up, and the second is physical proximity.”



- 上にいる参与者が力の程度が行使できる程度に下にいる参与者に近接している場合に、支配的意味が生じる。
- overとunderに支配的意味があり、aboveとbelowにないのは、支配者と被支配者が近接していないからである。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 18

## 3. overとunderの支配的意味

- overとunderの支配的意味
  - (16) a. She has a strange power over me. (太田 2009: 38)
  - b. China exercises sovereignty over Hong Kong. (ibid.: 40)
  - (17) a. We are under contract. (ibid.: 38)
  - b. He has fallen under her control. (ibid.: 42)
  - c. He came under the influence of Herbert Spencer. (ibid.: 42)
- (16)と(17)のoverとunderは「支配的意味」に分類される。
  - 支配者が非支配者を力を持って支配している。
- 一方、詳しく見ていくことで、overとunderの支配的意味には、統語的意味の違いも見られる。

### 3. *over*と*under*の支配的意味

#### • *over*の支配的意味

- (a) He has no control over the length of speeches.  
 支配者 支配力 被支配者
- (b) The president holds sway over all the important decisions.
- (c) China exercises sovereignty over Hong Kong.

#### <特徴>

1. 支配者が主語の位置に現れる。支配者は多くの場合人間か組織であり、意志と力を持つ
2. 目的語は支配力を表す。目的語には*power, sway, control, influence, authority*などの抽象名詞が入る。
3. 被支配者は目的語の後ろに、*over*の補語として現れる。
4. *over*の支配的意味と共起する動詞は(a)や(b)のように、保有や獲得を表す動詞か、(c)のように「力の行使」を表す動詞である。

### 3. *over*と*under*の支配的意味

#### • 相違点2: 支配力の種類

- *over*
  - 直接的で特定化された力の行使を表す。一方、*under*が表す力は特定性が低く一般的な力を表す。
  - 支配者が主語位置に現れるので必ず特定される。典型的に主語は人間か組織であり、被支配者に対して直接的な力行使する傾向が見られる。
- *under*
  - 被支配者がなんらかの支配下におかれた状態を表す。
  - (a)の例では、*Herbert Spencer*が被支配者に対して、意志を持って特定の力を行使しているわけではなく、被支配が*Herbert Spencer*の影響下にある状態を表すのみである。また、*under*句内に現れる支配者は、任意であるので、一般性が高い場合は、言語的な表されない。

- (a) He came under the influence of Herbert Spencer.  
 (b) We are under contract.

### 3. *over*と*under*の支配的意味

#### • *under*の支配的意味

- (a) She has fallen under his control.  
 被支配者 支配者 支配力
- (b) She came under the influence of Herbert Spencer.
- (c) They're under contract.

#### <特徴>

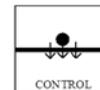
1. 被支配者が主語の位置に、支配力が*under*の補語に、支配者は*under*句の中に、選択的に現れる。
2. 支配者が一般的であり特定できない場合、現れない((c)を参照)。
3. *under*の支配的意味と共起する動詞は、(a)や(b)のように、自動詞か、(c)のように、コピュラ動詞である。

### 3. *over*と*under*の支配的意味

#### • 相違点のまとめ

	<i>over</i> による支配	<i>under</i> による支配
支配のタイプ	支配者の行為的支配	非支配者がおかれた状態的支配
TR/LMの関係性	直接的で他動性が高い	間接的で他動詞が低い
支配力の性質	特定性の高い支配力	一般的な効力/事態の前提

- *over*は通常、支配者の直接的で能動的な支配を表す。
- *under*は通常、被支配者が支配された状態を表す。



*over*の支配的意味



*under*の支配的意味

### 3. *over*と*under*の支配的意味

#### • 相違点1: *over*と*under*が表れやすい文型

- a. 【支配者】+【動詞(所有/獲得/力の行使)】+【支配名詞】+【*over*】+【非支配者】  
 b. 【非支配者】+【コピュラ動詞/状態変化動詞】+【*under*】+【支配名詞 + (支配者)】

1. *over*句は名詞句内に現れる。一方、*under*句は補語や付加句(*adjunct*)として現れる
2. *over*は他動詞と、*under*は自動詞と共起する傾向が見られる。
3. *over*の支配的意味は、*under*の支配的意味よりも他動性が高い。

### 4. 空間的意味から支配的意味へ

- *over*と*under*の支配的意味の基盤となる空間的意味の特徴を論じる。
- 最初に、*under*の支配的意味に見られる付加句的な特徴の基盤を、*over*と比較しながら考察する。
- 空間的において、*over*と*under*で非対称的な振舞いが見られる。

- (a) John walked *over* the bridge.  
 (b) John walked *under* the bridge.

- (a)はJohnが橋を歩き渡った事態を表す。*over*は経路
- (b)は典型的には、Johnが橋の下を歩いている事態を表す。*under*句はその下の領域で歩くという事態が起こるセッティングを表す。

- (c) It is *under* [\**over*] the bridge where he walked (around).  
 (d) *Under* [\**Over*] the bridge, he walked (around).

- この解釈の違いは、垂直軸に関する非対称的な経験に動機づけられている。重力があるため、人間は橋の下側を歩くことができない。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 25

### 4. 空間的意味から支配的意味へ

<その他の非対称的な解釈>

1. 接触性の違い
  - (a)の場合、主語と補語は接触している。(b)はしていない。
2. エネルギーの移動
  - (a)の場合主語と補語の間にエネルギーの移動がある。(b)の場合はない。(a)は上から下へ圧力がかかるが、(b)はかからない。
3. 前置詞句の意味的振る舞い
  - (a)のover句は主語が通る経路を、(b)のunder句は主語が動き回る場所を表す(under句はその下で事態が起こる場所を特定する=セッティング)。
4. 前置詞の文法的振る舞い
  - (a)のover句は動詞の補語句、(b)のunder句は動詞の付加句

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 28

### 4. 空間的意味から支配的意味へ

• 空間的意味から支配的意味への拡張のまとめ

	空間的意味		支配的意味	
	over	under	over	under
事象の性質	動作的	状態的	行為的	状態的
TR/LMの関係性	接触	非接触	直接的	間接的
文法関係	項の一部	付加詞的	項の一部	付加詞的

- overの支配的意味は、意志を持った主語で、接触を伴う直接的な支配を表す。一方、under句が表す付加詞的なセッティングは、意味拡張が進むにつれて、「物理的な範囲」、「支配の及ぶ範囲」、「条件の及ぶ範囲」へと拡張する。
- overとunderの支配的意味の違いは、空間的な意味(すなわち、ヒトによる外部世界の認識)に動機づけられる。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 26

### 4. 空間的意味から支配的意味へ

• 空間的意味から支配的意味へ(over)

- 上の参与者(TR)から下の参与者(LM)への直接的な圧力が支配的意味の基盤になる。つまり、TRとLMが接触する場合、重力により上のTRから下のLMへ直接的な圧力がかかる。例えば、(a)では、空間的に上のTRが下のLMを力関係においても実際に支配している。

(a) The fight ended with John standing over Mac, his fist raised.  
(Tyler and Evans 2003: 101)

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 29

### 5. 支配的意味から文法機能へ

• 支配的意味から文法機能の獲得

- Underのみに文法化した用法が見られる。
  - (a) Under the agreement most agricultural prices would be frozen or cut.
  - (b) Under a Labour government, the situation might not be that different.
- underの文法機能は支配的意味から拡張する。

over: spatial sense → control sense → \* grammatical function  
 under: spatial sense → control sense → grammatical function

semantic extension          functional change

<意味の拡張の流れ>  
 [何かの下に居る状況] → [何かの影響下にある状況] → [何らかの条件下にある影響]

- 拡張的な意味だけでなく、文法機能も空間的意味から派生する可能性を示唆。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 27

### 4. 空間的意味から支配的意味へ

• 空間的意味から支配的意味へ(under)

- (a) John walked over the bridge.
- (b) John walked under the bridge.

- (a)と(b)の対比が表すように、under句は経路ではなく、その下の領域で事態が起こる場所を表す解釈が優勢
- この場所(=セッティング)を表す用法がunderの支配的意味の基盤となる。支配的意味への意味拡張が起こると、セッティングが空間的な範囲から支配領域へと拡張する。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 30

### 5. 支配的意味から文法機能へ

• under句とif節の類似した機能

- (1a) Under the agreement, the prices would increase.
- (1b) If they were under the agreement, the prices would increase.
- (2a) Under his father's control, he would be happy.
- (2b) If he were under his father's control, he would be happy.

• under句とif節の異なる振る舞い

- (3a) Under the agreement, the prices would increase.
- (3b) ?Under no agreement concerning the matter, the prices would increase.
- (3c) ??Under no agreement, the prices would increase.
- (4a) If there were an agreement, the prices would increase.
- (4b) If there were no agreement concerning the matter, the prices would increase.
- (4c) If there were no agreement, the prices would increase.

## 5. 支配的意味から文法機能へ

<続き>

(4a) Under *his father's control*, he would be happy.

(4b) ?Under *no control of his father*, he would be happy.

(4c) ??Under *no control*, he would be happy.

(5a) If *his father exerted control*, he would be unhappy.

(5b) If *his father exerted no control*, he would be unhappy.

(5c) If *no control were exerted*, he would be unhappy.

- *if*節とは異なり、*under*句は条件が空間的に見立てられない場合は、文法の容認性が落ちる。
- *under*句の文法機能は、空間的な意味から支配的意味を通して派生する。

## 研究のポイント

### • 二種類の*aside*構文

1. 現在分詞タイプ(節型)
  - *Leaving aside* this particular controversy, there is a great deal of interest in the topic.
2. 後置詞タイプ(句型)
  - *Politics aside*, the Vietnam industry is a profitable one.

### • 主張

1. *aside*構文は頻度が高くなると、談話機能を獲得する。
2. 二種類の*aside*構文は意味的には類似するが談話的機能が異なる。
  - 現在分詞型は先行文脈との関連が強い。
  - 後置詞型は、先行文脈との関連が弱く、主節との関係が強い。

## 6. まとめ

1. *over*と*under*が表す支配的意味は文法的にも意味的にも異なる特性を持つ。
2. *over*と*under*の支配的意味は空間的な意味から派生する。
3. 人間が認識する世界の垂直軸は非対称的にできしており、この非対称性が、*over*と*under*の非対称的な支配的意味の基盤となる。

## 目次

1. はじめに
2. 文脈における構文
3. データと方法論
4. 事例研究1: 二種類の*aside*構文の文法化
5. 事例研究2: 二種類の*aside*構文の談話機能の違い
6. まとめ

## 事例研究2: *aside*構文の談話機能

## 1. はじめに

### • 目的

- *aside*を含む二種類の構文がどのような特徴を持つかを考察する。

### • 考察対象

- 従属構造(dependent structures)に現れる*aside*構文
  - AC1: 現在分詞タイプ(the present participle type)
    - However, *leaving aside* that possibility, it can be argued that such a clause merely defines the seller's obligation.
    - *Setting* this show and its problems *aside*, what we need generally is some fresh thinking and some fresh air.
  - AC2: 後置詞タイプ(the postpositional type)
    - Regional roots *aside*, the band always wisely distanced themselves from the now-dead scene.
    - Prejudice *aside*, the Republic has shown the best form in the group so far.

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 37

## 1. はじめに

- *Aside*構文の特徴
  1. 従属節あるいは従属句内のみに見える(主節内には表れない)。
  2. 談話機能(the discourse-organizing function)を持つ。
    - 従属節によってある一つの主題や側面を除外して、主節で新しい主題を導入する。
  3. 統語的に不規則(dangling participle and postpositional use)
- 談話機能を持たない*aside*
  - (1a) He pushed the pad *aside* and began to type again.
  - (1b) She had stepped *aside*, so that her face was in shadow.
  - (2a) Pushing temptation *aside*, he left the casino and ....
  - (2b) Seeing her wince, Mike lifted her, brushing her objections *aside*.
    - これらの文では、*aside*は(複)文の内部で機能している。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 40

## 2. *aside*構文と談話機能の先行研究

### 1. 懸垂分詞(dangling participles)

- 懸垂分詞の定義:
  - No subject for the underlined verb is recoverable from the matrix phrase
  - \**Walking down the street*, his hat fell off. (Huddleston and Pullum 2002: 611)
- 懸垂分詞の例
  - *Looking up*, there were three boys standing there. (Ando 2005: 246)
  - *Seeing there are three of you*, it would make sense if I made a fourth and helped to leg. (Hayase 2007: 77)
- 慣習化した懸垂分詞の例
  - *Strictly speaking*, Mr. Smith is going to retire at the end of this year.
  - *Taking everything into account*, the thing seems to be going fine.
  - *Supposing* you are offered the job, will you accept it? (*ibid.*: 77-78)

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 38

## 1. はじめに

- 本稿で論じる仮説
  - 仮説1: AC1とAC2には談話標識への現在進行中の文法化が見られる。
    - ⇒調査1
  - 仮説2: AC1とAC2では談話機能が異なり、AC1はAC2に比べて総合的な機能を持ち、先行文脈とのつながりが強い。
    - ⇒調査2

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 41

## 2. *aside*構文と談話機能の先行研究

### 2. 語順の談話的な要因

- 語順によって伝わる意味が違う。
- [例] 副詞 *once*
  - He *once* didn't come. (he came on every occasion but one)
  - He didn't *once* come. (he never came) (Dixon 2005: 442)
- 目的節 (Thompson 1985)
  - *To cool*, place the loaf on a wire rack.
  - Place the loaf on a wire rack *to cool*.
  - 主節の前に現れる目的節は、先行文脈で示された問題に対して、主節でその解決策を提示するのに対し、主節の後の目的節は、より局所的・意味論的機能が強く、先行する主節の目的節を示す(Thompson 1985)

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 39

## 2. *aside*構文と談話機能の先行研究

- 談話レベルで機能する構文の研究
  - 従来の構文研究の中心的な課題は、構文(語・句・節)が持つ単文内の意味である。
  - 構文には、単文内でなく、単文を超えて働くものがある。
    - [例] *aside*構文
      - 単文内ではなく、文を超えて談話内で一定の役割を担う。
  - *aside*構文の談話機能を考察するうえで関連する現象
    1. 懸垂分詞
    2. 語順に関する談話的な動機づけ
    3. 談話標識

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 42

## 2. *aside*構文と談話機能の先行研究

### 3. 談話標識

- 談話標識の基準(after Zwicky 1985; Fraser 1999)
  - (1) It has to be syntactically detachable from a sentence.
  - (2) It has to be commonly used in initial position of an utterance.
  - (3) It has to have a range of prosodic contours.
  - (4) It has to be able to operate at both local and global levels of discourse.
- 談話標識の起源
  - Fraser(1999)は談話標識の統語カテゴリーに注目して、談話標識は独立した統語カテゴリーを構成せず、接続詞、副詞、前置詞句などがその主な起源と主張。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 43

### 3. データと方法論

- データ
  - The British National Corpus
    - 約1億のイギリス英語からなる汎用コーパス(約9割の書き言葉と約1割の話し言葉)
  - 分析対象の収集方法
    - BNCから、不変化詞 *aside* を含む構文の全3447例を検索し、コンコーダンスラインを作成する。
    - 検索したデータをエクセルに移し、従属構造に現れる*aside*を手作業で抽出する(全部で588例)。
    - 従属構造に現れる*aside*の全588例を考察対象とし、統語・意味・談話レベルの6つの要素についてコーディングを行う。
    - コーディングをしたデータに基づいて、主に頻度を集計して、二つの事例研究を行う。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 46

### 研究1: *aside*構文の談話機能について

- 仮説1:
  - aside*構文は、現在進行中の談話標識化(文法化の一種)を示す。*aside*構文の談話標識化には、頻度が大きく関与している。
  - BNC内で*aside*が従属構造内に現れる588例を考察する。
  - 表1 動詞別の*aside*構文の機能の集計
  - 表2 *aside*構文の機能と主節に対する生起位置
  - 表3 *aside*構文1の機能と構文内の語順

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 44

### 3. データと方法論

- コーディングする要素
  - (a) *aside*の機能: 全体的・語用論的 / 局所的・意味論的
    - ※機能を判定する基準としては懸垂分詞であるかどうかを手掛かりとする。
  - (b) *aside*句・節の主節に対する位置: 前 / 間 / 後
  - (c) *aside*句・節内の名詞の特徴: 定 / 不定 / 代名詞
  - (d) レジスター: 話し言葉 / 書き言葉
  - (e) *aside*節内の語順: *V-ing aside* NP, ~ / *V-ing* NP *aside*, ~
  - (f) *aside*句・節内の名詞句の長さ
- 予備調査の結果1
  - AC構文1内で用いられる動詞一覧(39個)
    - bat, beat, brush, cast, drag, draw, elbow, flick, fling, force, glance, hurl, kick, knock, lay, leave, lie, lift, move, nose, nudge, order, pull, push, put, say, set, shoulder, shove, stand, step, swing, take, throw, thrust, toss, turn, twist, wave*

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 47

### 研究1: *aside*構文の談話機能について

- 表1 動詞別の*aside*構文の機能

	全体的・語用論的	局所的・意味論的	合計
1 leave	181 (99%)	1 (1%)	182
2 NP <i>aside</i>	175 (100%)	0 (0%)	175
3 set	40 (83%)	8 (17%)	48
4 push	0 (0%)	38 (100%)	38
5 put	16 (50%)	16 (50%)	32
6 brush	3 (15%)	17 (85%)	20
- 他の動詞	6 (6%)	87 (94%)	93
- 合計	421 (72%)	167 (28%)	588

- 頻度の高さと全体的・語用論的機能に関する興味深い相関関係
  - 頻度が高い*aside*構文は全体的・語用論的機能を持つ。
  - 頻度数が7位以下の34種類の動詞の合計では、95%の具体事例が局所的・意味論的機能を持つ。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 45

### 3. データと方法論

動詞	頻度
Leaving	182
NP <i>aside</i>	176
Setting	48
Pushing	38
Putting	32
Brushing	20

- 予備調査の結果2
  - AC構文1内で用いられる動詞の傾向
    - 頻度が1の動詞は17個
    - 30個(全体の75%)の動詞の頻度は5以下。
    - 右表以外の構文の頻度は10に満たない。
  - 以上の予備調査を受けて、2つの事例研究を行う。
- 調査1: 仮説1の検証
  - 全体的・語用論的機能を持つ*aside*構文と局所的・意味論的機能を持つ*aside*構文を比較する。
- 調査2: 仮説2の検証
  - 2種類の*aside*構文間の談話的機能の違いを考察する。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 48

### 研究1: *aside*構文の談話機能について

- 表2 *aside*構文の機能と主節に対する生起位置

	全体的・語用論的	局所的・意味論的	合計
前	351 (87%)	53 (13%)	404
間	52 (66%)	27 (34%)	79
後	18 (17%)	87 (83%)	105
合計	421 (72%)	167 (28%)	588

- 全体的・語用論的機能を持つ*aside*構文は主節の前に、局所的・意味論的機能を持つ構文は主節の後に現れる。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 49

## 研究1: *aside*構文の談話機能について

・表3 *aside*構文1の機能と構文内の語順

	全体的・語用論的	局所的・意味論的	合計
AC1 (V + <i>aside</i> + NP)	196 (73%)	74 (27%)	270
AC1 (V + NP + <i>aside</i> )	48 (39%)	75 (61%)	123
AC1 (no overt object)	2 (10%)	18 (90%)	20
合計	246 (72%)	167 (28%)	413

- 全体的機能をにう時、動詞と*aside*が連続して出現する傾向がある。
- 局所的機能をにう時、動詞と*aside*の間に目的語が入る傾向がある。
- aside*構文には明示的な目的語がないものも存在する。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 52

## 事例研究2: *aside*構文の談話的機能

- 仮説2
  - 二種類の*aside*構文は談話的機能が異なる。*aside*構文1は*aside*構文2に比べ、先行文脈との関連性が高く、全体的・語用論的機能が強い。
- 方法論
  - aside*構文の中で全体的機能を持つ421例を考察対象として、*aside*構文1と*aside*構文2の談話的機能の違いを分析する。

動詞	頻度
<i>leave</i> (AC1)	181
NP <i>aside</i> (AC2)	176
<i>set</i> (AC1)	40
<i>put</i> (AC1)	16
others (AC1)	8
総計	421

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 50

## 研究1: *aside*構文の談話機能について

- 全体的機能を持つ*aside*構文が持つ特徴
  - 局所的機能を持つ*aside*構文に比べ、高頻度である(表1)。
  - 主節の前に現れる傾向がある(表2)。
  - aside*構文1では、動詞と目的語が連続して現れる(表3)。
- 頻度が最も高い*leaving aside*構文と*aside*構文2の共通性
  - ほとんどが全体的機能を持ち、主節の前に現れる傾向がある。
  - 文法的に不規則であり、内部構造の融合(fusion)も進んでいる。
  - 談話標識の基準を満たしている。
    - 談話標識の基準
      - It has to be syntactically detachable from a sentence.
      - It has to be commonly used in initial position of an utterance.
      - It has to have a range of prosodic contours.
      - It has to be able to operate at both local and global levels of discourse.

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 53

## 事例研究2: *aside*構文の談話的機能

・表5 全体的機能を表す*aside*構文内の名詞タイプ

	定	非特定の	指示詞	合計
<i>leave</i>	132 (73%)	43 (24%)	6 (3%)	181
NP <i>aside</i>	44 (25%)	103 (59%)	29 (16%)	176
<i>set</i>	24 (60%)	15 (38%)	1 (3%)	40
<i>put</i>	12 (75%)	2 (13%)	2 (13%)	16
others	4 (50%)	3 (38%)	1 (13%)	8
合計	216 (51%)	166 (39%)	39 (9%)	421

- NP *aside*は非特定のな名詞句を取る傾向があるが、他の構文は定名詞句を取る
  - a. Ugliness *aside*, the standard of workmanship is very good.
  - b. So, *leaving aside* the hardware involved, is feature analysis one of the processes involved in object perception?

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 51

## 研究1: *aside*構文の談話機能について

- まとめ
  - aside*構文に見られる言語変化
    - 談話標識化(文法化)
      - 談話標識化の流れ: 頻度の上昇 > 形式の固定 > 主節の前への出現
    - 語用論化
      - 意味的 > 意味の弱化 > 語用論的(全体的、レトリック的)
    - 主体化
      - Syntactic subject > Speaking subject
      - Propositional function > Discourse markers
      - Objective meaning > Subjective meaning
  - 本調査が示唆する点
    - 頻度は文法化を引き起こす重要な要因
    - 形式の固定化と内部構造の融合は文法化に付随して見られる
    - 談話標識化した構文は、主節前に現れる傾向
- ⇒*aside*構文は談話標識化しており、仮説1は支持される。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 54

## 事例研究2: *aside*構文の談話的機能

・表6 構文別の名詞タイプの分類

	定	非特定の	代名詞	合計
<i>aside</i> 構文1	172 (70%)	63 (26%)	10 (4%)	245
<i>aside</i> 構文2	44 (25%)	103 (59%)	29 (16%)	176
合計	216 (51%)	166 (39%)	39 (9%)	421

- AC1が定名詞句を、AC2が非特定のな名詞句を取る傾向
- 一般的に、定名詞句は、先行する文脈ですでに言及された旧情報を指すのに対し、非特定のな名詞句は、先行文脈で言及されていない新情報を示す傾向がある。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 55

### 事例研究2: *aside*構文の談話的機能

- AC1
  - However, the fact that fewer people in low **income** groups use credit at all means that, of those who do, a higher proportion are likely to be heavy credit users. **Leaving income aside**, the people with the heaviest credit commitment tend to be young.
  - Comte (Martineau 1853) proposed a hierarchy of positive sciences [...] The hierarchy begins with **mathematics**, and then moves up through astronomy, physics, chemistry and biology to sociology at the top. **Setting aside mathematics** for the moment, the different levels can be seen in terms of scale [...], in terms of envelopes [...] or perhaps best in terms of levels of organization [...].
  - aside*構文1(分詞タイプ)の談話機能: 先行文脈で提示された旧トピックを除いて、後続する主節で新トピックを導入する。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 58

### 事例研究2: *aside*構文の談話的機能

- 二種類の構文になぜ談話機能の違いが生じるか。
  - 句と節の談話機能の違い
    - 節が句よりも先行文脈との関連が強く、全体的な機能を持ちやすい?
      - 節は句に比べて、主節からの独立度が高い
      - 従属節は主節から自由になり先行文脈とも関連するが、従属句は主節に対する依存度が高いため、主節と関連する局所的な機能を持つ傾向が見られる?
  - cf. 談話機能と従属節について
    - 語順と談話機能(先行研究)
      - 主節の前の従属節の方が先行文脈との関連が高い。
      - Thompson(1985)やFord(1997)
        - a. **To cool**, place the loaf on a wire rack.
        - b. Place the loaf on a wire rack **to cool**. (Thompson 1985)
- 本調査の結果は、語順によって談話機能が異なる点と同様に、句か節かという構造の違いによって談話機能が異なる可能性を示唆する。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 56

### 事例研究2: *aside*構文の談話的機能

- AC2
  - Hence, one could conclude, for instance, Middlesbrough's success in Heseltine's City Challenge scheme; a part of which will, if the council's full bid is passed, see a £50m housing investment programme for hard-hit outlying areas. **Politics aside**, however, there are growing doubts about the validity of all main party housing policies.
  - Hello, Contrary to Stu's reports, I wasn't deported from the Netherlands for looking like E. Cantona! I actually had a happy week's holiday (**Black Wednesday aside**) free from the clutches of the Dutch police dragnet. I came back of my own free will on Friday, and went to the game yesterday.
  - aside*構文2(後置詞タイプ)の談話機能: 新トピックの重要であるが都合が悪い側面を前もって除外する。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 59

### 事例研究2のまとめ

- 事例研究2で明らかになった点
  - aside*構文が現在進行中の談話標識化をしている。
  - 2つの*aside*構文では談話内での機能が異なり、*aside*構文1の方が、より全体的な機能を持つ。
- 事例研究2が示唆する点
  - aside*構文は談話内で一定の機能を持つ構文であるので、文脈から切り離された作例ではなく、用法基盤の分析をされる必要がある
  - 言語ユニットは、談話の中で定着し、談話の分離不可能な一部であることを考えると、構文研究は本質的に用法基盤であるべき。
  - 言語コーパスが整備され、方法論や理論が発展した現在、用法基盤を中心にした学際的な言語研究をすることで、使用の中で揺れ動く、言語の動的な側面がますます明らかになっていく。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 57

### 事例研究2: *aside*構文の談話的機能

- 二種類の*aside*構文のまとめ
  - aside*構文1(分詞タイプ)の談話機能: 先行文脈で提示された旧トピックを除いて、後続する主節で新トピックを導入する。
  - aside*構文2(後置詞タイプ)の談話機能: 新トピックの重要であるが都合が悪い側面を前もって除外する。

- aside*構文1は*aside*構文2に比べてTopic continuity (Givón 1983) が高い。
- aside*構文は*aside*構文2に比べて、より総合的・談話レベルで働く。

2015/5/20 語学研究所 定例研究会 60

### 全体のまとめ

- 前置詞の意味拡張
  - 前置詞が持つ文法機能は空間的意味から抽象的意味を介して拡張する。
    - 空間的意味 ⇒ 抽象的意味 ⇒ 文法機能
      - 連続的な言語観(意味論と語用論、意味と機能)
      - 文法的な特性は意味的な特性によって動機づけられる。

図1 表象のレベル(Evans and Green 2006: 7)

- 「文法」あるいは「形式と意味のせめぎ合いを捉える」うえで、世界と相互作用する人間の認識の仕方を考慮することが重要である。
- 以上の理由で、認知言語学的(あるいは身体性)な観点から、言葉を見ている。

ご清聴ありがとうございました。

ご意見・コメント・ご批判は  
下記のアドレスまでお寄せください。

[otani@tufs.ac.jp](mailto:otani@tufs.ac.jp)

今後ともよろしく願いたします。